

第 21 回北東アジア地域研究会・国立民族学博物館拠点（月例会）報告
（超域フィールド研究会との共催）

平成 31 年 6 月 21 日に国立民族学博物館において、第 21 回北東アジア地域研究会・民博拠点（月例会）を超域フィールド研究会と共同開催いたしました。

リチャード・ノル氏（ド・サール大学准教授、JSPS 短期訪問学者@滋賀県立大学）をお迎えし、「不可視の現実を作ること—シャーマンやその他の呪術宗教的实践者たちは、いかにして精霊や神、悪魔や祖先霊、そしてイエス・キリストさえをも見たり、聞いたり感じたりする技能を開発してきたか—」というタイトルで報告をしていただきました。拠点構成員 5 名、館内研究者 1 名、館外 3 名の計 9 名が参加しました。



講演概要：個々の人間が超自然的なエージェントに出会ったり、異世界に旅をしたりといったリアルな経験は、数多く報告されてきた。これらの超自然的存在や異世界は、他者からすると不可視のものである。しかしながらこうした個々の主観的な経験に基づいた主張は、それら不可視のエージェントや世界が実在することの証拠としてみなされてきた。このような不可視のエージェントや世界との関係は、いかにしてそれらの経験を繰り返すかを学習することを通して確立され、維持されてきた。本講演では、過去 35 年に及ぶ宗教の認知科学の調査によって、「想像力の開発（ノル）」や「内的感覚の開発（ラーマン）」として知られてきた通文化的実践を、不可視のエージェントや世界といった「超現実 (Hyperreality)」

を強化するような文化に由来する「再帰的信仰 (reflective beliefs)」を維持する技術として捉えていきたい。事例として挙げるのは、シャーマニズム、チベット仏教、西洋の儀礼的呪術、ユングの分析心理学、アメリカにおける刷新主義的なプロテスタント・クリスチャン(アメリカの総人口の 23%を構成する) などである。さらにアメリカ政府が近年、情報開示した極秘の「遠隔視 (remote viewing)」計画 (1970 年代~1990 年代) 及び中国における似たような極秘の計画にも言及する。